

# 荒野

あらの 高橋たか子

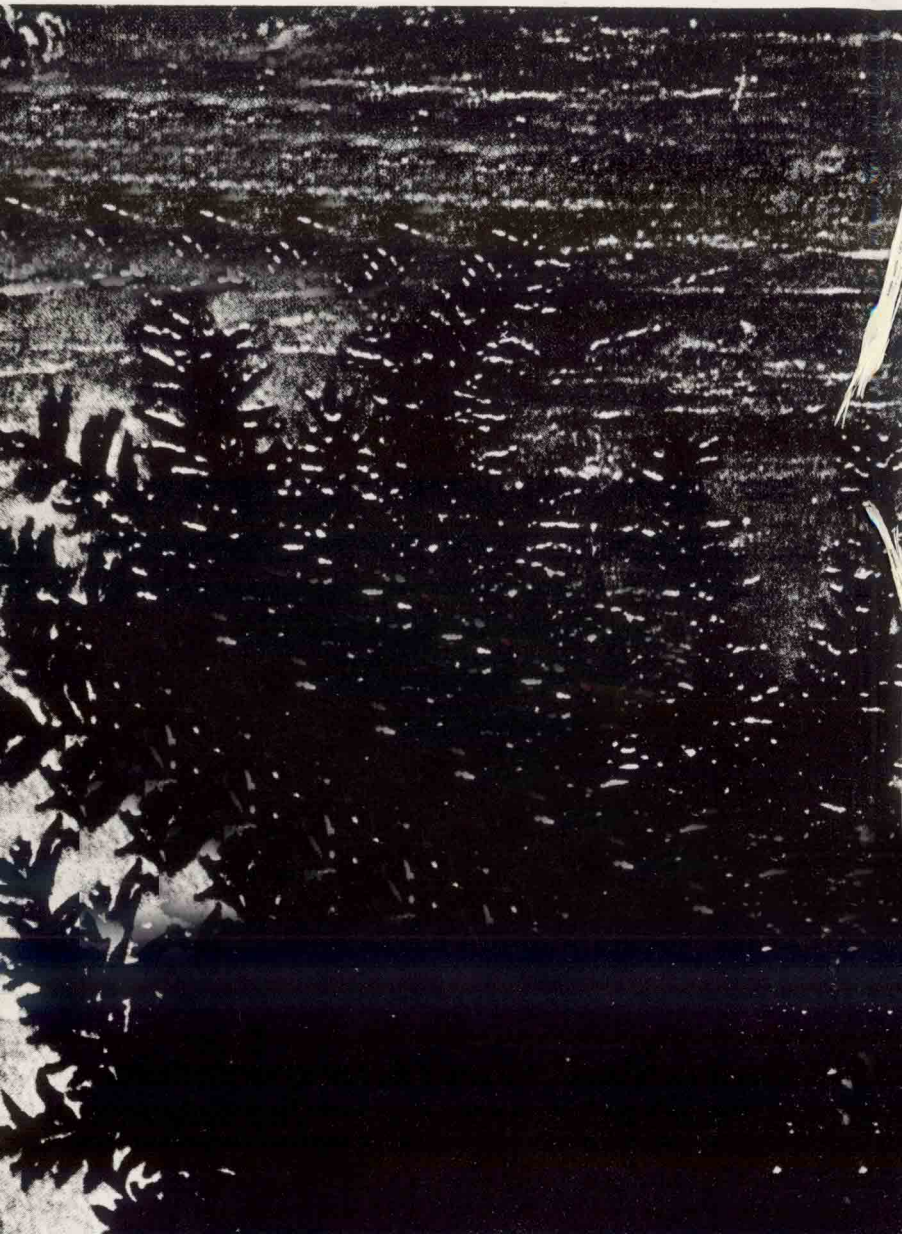


# 荒野

あらの

## 高橋たか子

河出書房新社



# 荒野

昭和五十五年三月二十五日 初版発行  
昭和五十五年四月二十五日 再版発行

著 者 高橋たか子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 編集〇三―四〇四―八六一―

営業〇三―四〇四―一二〇―

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 小高製本

©1980 TAKAKO TAKAHASHI

定価はカバー・帯に表示しております

荒<sup>あら</sup>  
野<sup>の</sup>

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



私は彼女を荒野にみちびき

そのところに語ろう

——ホセア書

装  
幀

榛  
地  
和

野辺道子<sup>のべみちこ</sup>は、東京都の地図を買いに出て、いま帰ってきた。地図で探さねばならないところがあるのだ。

夏の終りの、しかも午後の終りという時間には、なにかひどく耐えにくいものがふくまれている、と感じる。いまにかぎったことではない。子供の頃からそう感じていた。季節にしろ昼間にしろその終りという時には、それまでに発生した何かが、じつとりと、またずっしりと、溜まってしまふからだろうか。いがらっぽく黄ばんだものを連想させる。とはいっても色も匂いもない。何かが終りかけている時のそうした性質が、どうしようもなく自分を蝕んでしまうと思ひながら、まるでわざとその感覚を味わうためのように、日照りのなかを本屋まで出かけて行って地図を買ってきたのであった。

馴れない道だった。普段は通る必要のない道筋を歩いた。駅前にも本屋があるのだが、そこは東西の幹線道路にあたっていて大型トラックがひっきりなしに地ひびきをあげているので、脇道にある本

屋へ行くことにしたからだ。ところが、途中で、やはり大型トラックに出会ってしまった。この前に一度だけ通った時はそうではなかったのに大がかりな工事が行われていた。古い建物をこわして何かを建てるらしかった。壁土にまみれた古板を満載しているトラックが、その空地から出ようとしていた。狭い道でうまくターンできなくて、しきりに試みているのだがどうもうまいかない。そのため野辺道子は立ち止まって待っていなければならなかった。飛び散る壁土が風を黄色くしていた。トラックも運転手もその土地そのものも、ひどく苦しんでいるふうにみえた。野辺道子は何度も汗をふいた。その場で、いったい何のためか、大きな苦しみが進行していて、自分までがそれに加わっている気がした。以前ここに何があったのか野辺道子は知らなかった。先々月の七月に東京に引越してきたばかりだからである。東京に住むのははじめてだった。

だが、東京都の地図を買いにいったのは、知らない街のことをいろいろ知るためではなかった。

クレーのきいたマンションにもどると、すこし汗がひいた。工事現場の黄色い風を思い出して、石鹸で手を洗い、うがいをした。手や口はきれいになったが、黄色い風はいつこうに消えない気がする。広がって東京の街をすっぽりおおってしまう。街全体が砂塵の色に染まってしまう。

野辺道子は冷蔵庫からポットをとりだし、冷たい麦茶をコップにそそいで、一気に飲んだ。壁面の時計に目をやると、四時二分だった。夫の敬太郎が先週から海外出張で出かけているので夕食の準備に気をつかうこともない。好きな時に好きなものを食べて暮らすわがままは後一週間ほど続けていられる。だが、その一週間ほどの間に、つまり敬太郎が帰国するまでに、どうしてもしなければならぬことがあった。そのことが日々の気がかりになっている。気がかりから遠ざかるために、野

辺道子はいま買ってきた地図をダイニング・キッチンテーブルの上に置いたまま、寝室へ入り、ベッドに仰向けになった。

ぼんやりそうしている。特に何もすることは無い。夫は留守だし、この大都市に一人の友人もない。野辺道子は仰臥に疲れると、立ち上って、寝室の窓辺に立った。大きなヴェランダがある。リビング・ルームにも細いヴェランダがついているが、すぐ前に立つマンションに面しているので、人から見られずに立てる窓辺はこしかなのである。大きいというより大きすぎるヴェランダで、畳十二畳分ぐらいの面積だった。建物のいちばん端にあるこの部屋にだけこんなものがくつついている。下に建物全体のための機械室があり、その屋上がこういうふう利用されているとのことだった。

西陽が白くはじけている。熱せられ続けているので、コンクリートの表面はフライパンのように焼けていることだろう。ビルばかりがあり、一つ一つの色が違っていて、それらの全体は不調和そのものだった。植物らしいものはなく、ビルの谷間に残っている住宅の庭木が見えないわけではないけれども、みどりとは言えないほど埃と熱に喰い荒らされてしまっている。ちょっと窓をあけるだけで、たちまち熱気が顔に吹きつけてきて、すぐに窓をしめねばならなかった。

快い眺めではないのにいつまでもヴェランダの白い反射に目をあてている。或る場面がそこに浮かんでくる。

こんな大きすぎるヴェランダってないほうがいいのにね。私、落着かないわ。と、野辺道子は引越してきた日に言ったのだった。

そうかい、ぼくはこれが気にいったんだ。これがあるからここに決めたほどなんだ。

敬太郎は答えた。マンション探しは一切、彼がやったのだった。

子供の遊び場にはもってこいだけど。子供もいないし、それに……子供なんてまっぴらだし。

野辺道子は口をとがらせて言葉を続けた。

じつはね、名案があるんだ。

敬太郎は逆にはずんだ声で言った。

野辺道子は訊ね返さなかった。

ピンポン台が置けると思わないか。

え？……誰とピンポンするの？

きまつてるじゃないか、道子とぼくだ。

敬太郎は野辺道子の肩をたたいて、笑って言った。

野辺道子はそれがいいともわるいとも口にだして言わなかったので、敬太郎はしばらくしてからピンポン台のカタログをとりよせた。夕食後の時間に一人であれだこれだと言いながら型や色を決めていた。すぐにでも注文して買うこともできたのだが、戸外に置くから防水布のカヴァーを特別に作らせなければならなかった。そのために手間どった。敬太郎は自分が二週間ばかり留守にしている間、カヴァーが出来あがる段取りにした。彼の帰宅とともにピンポン台が家に入ってくるだろう。

野辺道子はピンポンそのものが嫌なわけではない。

ヴェランダの西陽の照りかえしに目を据えて、考えるともなく考えている。だんだん光度がなくなつて、冥さが忍びこんでくるまで、そうしている。空にはまだまだ明るさがひろがりわたっていて、

長い一日は終りそうにない。

それから、夕食の仕度をすませ、一人で食べる。ダイニング・キッチンのテーブルの端に、東京都の地図がのつかったままである。それからまた、そのテーブルに肘をついていつまでもぼんやりしている。

夜になると、アルミサッシの窓がしまつていても、汽車や電車の響きがつたわってくる。たぐさんの交通路の集まつている東海道線S駅に近いのだから、昼も夜も、ひっきりなしに車輪の音を浴びているわけだが、その音が、夜ともになまなましくなる。遠いところから来る汽車や遠いところへ行く汽車が通るので、ここではないどこか別な土地が思われる気分になる。どこか別な土地といっても、行ってみたいと強くあこがれる土地が別段あるわけでもない。生まれた都市、育った都市、敬太郎と四年住んだ都市、それから二年ほど転勤になった敬太郎が単身で住むところへ時々会いにいった都市、どれも地方都市だが、それら過去の土地が、鬱陶しく重い車輪の音にのって思われてくる。

「そうそう、地図を見なくっちゃ」

野辺道子は自分に言う。

立ち上り、寝室まで行き、アドレスの書いてある紙片を鍵のかかる抽出からとり、もどってくる。やっと地図を手にとる。

何ページにもなっていて、最初に東京都全体の大きな地図が折りたたまれている。開くと、まあたらしい紙の音がし、ひどく多様で複雑で、読みとることの困難な図形のように、それが目に迫る。無数の蟻みたいに小さな字が書きこまれている。電車をあらわす線が直線や曲線を描いてあらゆる方向

に走っている。網の目状にどこまでもひろがる面積は、誰かが誰かに会うために網の目をかきわけていっても決して会うことができないような眩暈を隠している。

全図をたたみこみ、区ごとのページを繰る。杉並区のところを開く。一つの区自体がまた網の目状のひろがりだ。

やがて、そういう印象をあたえる理由がわかる。町名がいたるところにしろされているからだ。誰かに会うためのしろしでなく会えなくさせるしろしのようにみえる。同じような区劃が次から次へと続いていて、その一つ一つに町があり、そこに何百軒もの住居がおさまり、その一軒ごとに何人かの人がある、という現象が、この地図の上ではてしなく反復されている。数が、多いだけでなく反復されている。杉並区、荻窪一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目と続いていて、次の区劃に、南荻窪一丁目、二丁目、三丁目、四丁目というふうに。

取りだしてきた紙片に目をやり、アドレスを読みとる。杉並区……………R精神病院。

それから、その番地を探しはじめる。戦闘機が空から爆撃目標を探して旋回するふうに、地図の上に前かがみになって、右手の人差指でたどっていく。郵便局のしろしがある。高校のしろしがある。さっきまではわざと遠ざけていたこの地図に、いま自分から急激にかかわっていくのを感じる。と同時に、ずっと避けてきた事柄に、じつはひどく執着していたかのような気がしてくる。神社のしろしがある。税務署のしろしがある。……………それから、そうだ、これ、R病院。R精神病院とは表示されていない。

まるで自分がそこまで歩いていったかのように、ふうっと溜息をつき、地図から顔をあげた。

「明日、行こう」

と、声にだして言った。

だが、どのようにして行けばいいのか。皆目わからない。地図で見ると、目的地のアドレスは、中央線の西荻窪からも荻窪からも阿佐ヶ谷からかなり離れている。地下鉄に乗ったりバスに乗ったりするにはどういう乗りかたをすればいいのか。訊ねる友人もいなかった。

それでもなお十分も二十分も地図を見ていた。自分の訪ねていこうとしている人が、この網の目状の面積のなかに埋もれている気がする。それにむけてさぐるような凝視の目をむけている。

やがて、病院へ電話をかけて道順を訊ねることを思いついた。時計を見ると、すでに九時すこし前だった。守衛か誰かがいて電話に出るだろう。電話帳で番号をしらべ、長くかかって見つけ、ダイヤルをまわした。

女の声が出た。

「もしもし、R病院ですか」

ひどくためらいながら言った。そこと自分との間についてつながりが出来てしまった。立ち向うべきであったものに立ち向うことになった、と考える。

「明日行きたいんですが道順をお教えいただけませんか」

地方なまりのある話しかたを気にしながら、野辺道子は事務的に言った。

「外来ですか」

相手は言った。

「知ってる人がそちらにいるのです」

知ってる人という言葉が棘のように自分に突きささる。

「面接ですね」

「そうです」

「面接時間は午後二時から五時までですから、それ以外にいらっしゃるとお会いになることができません。どなたですか」

「え？ 私ですか」

「患者のお名前」

野辺道子は一瞬ためらった。そして言った。

「村山かおり」

その言葉がひどく痛んだ。とはいっても、言葉の後ろにある実体はぼうつとかすみがかかったようになっている。思い出したくないと、野辺道子と思う。

「そのかたはもういらっしゃいません」

相手は簡単に言った。

「何ですって？ もうよくなったんですか」

退院していったい何処へ行ったのだろう。

「そういうことは私にはわかりません。とにかくお移りになったのです」

「移る？」

「ほかの病院です」

その病院の名を訊ねたが相手は知らなかった。誰か知っている人はいないかと訊ね返すと、夜間は当直の自分しかいないのだと相手は答えた。

茫然ととまどう気分のなかで、受話器を置き、ダイニング・キッチンに突っ立ったままにいる。やっと立ち向う気になった対象が、濃霧に紛れこんでしまった気がする。

テーブルにひろげたままでの地図に、目をやる。杉並区のページから、渋谷区、大田区、新宿区、豊島区、板橋区……と繰っていった、見るともなしに見ていく。どの区も、おびただしい網の目状をなしていて、同じにみえ、これでもかこれでもかといわんばかりに東京都がひろがっているのであつた。とにかく明日R病院へ行つて、事情を聞いてみようと思ひ立つ。そして、いま道順を訊ねなかつたことに気がつく。

リビング・ルームのソファに坐り、所在しないままに婦人雑誌のページをめくる。女たちの私利私欲の美化されたものがあらゆるページをおおっていて、そこから猛獣の叫びのようなものがたちのぼってくる気がし、すぐに雑誌をとじる。ひどく疲れているらしい。

それから、いつまでも何もせずにそこに坐っていた。

電話のベルが鳴った時、自分の落ちこんでいた場所から、強引に引きだされた。二時間も三時間もぼんやりしていたのか。ベルにむけて立ち上らず、何回も鳴るがままにしておく。東京には誰も友人はいないのだし、地方から高価な長距離電話がかかってくると思えない。敬太郎が予定より早く帰国したとも考えられない。機械的にベルの音をかぞえていたが、十五回目に、やっと腰をあげた。十

七回目のところで、受話器をとった。もしかしたら、いまのR病院から、別な病院の名がわかったことを知らせてきたのかもしれない、と一瞬思ったが、こちらの名前も電話番号も言わなかったのだから、そんなことはありえないと考えなおし、もしもとも言わずに受話器に耳をあてたままでいた。

「もしもし」

と、男の声がした。声を一点にひきしぼったような力んだ声だった。

ちょっと間があって、その声が続けた。

「いのちの電話ですね」

「は？」

と、野辺道子は訊ねかえした。野辺さんですねのかわりに別な姓が言われた場合とはまったく違った、なにか妙な言葉を耳にした気がしたからである。

「いのちの電話ですね」

男は繰り返した。

「いいえ」

野辺道子は言った。いのちの電話——聞いたことのない言葉である。

「二六四の四三三四でしょ」

男の声は続けた。

「すこしちがいます。四六二の四三三四です」

野辺道子は移ってきたばかりなのでまだなじめない自分の電話番号を、言った。